

【第57回広島大学教育学部国語教育学会・研究協議】まとめ

中学校・高等学校国語科における古文の授業

——古文学習の本質の追究とアクティブ・ラーニング——

間瀬 茂夫

一 はじめに

「中学校・高等学校における古文の授業」というのが今回の協議会のテーマである。本学会では、二〇一一年度から「新しい学習指導要領と国語科授業」というテーマで、三カ年にわたって現行学習指導要領の求める授業像を探究した。二〇一四度からは、今回と同様に、中学校・高等学校における「読むこと」（二〇一四年度）「書くこと／話すこと・聞くこと」（二〇一五年度）の授業について取り上げてきた。では、この何の変哲もないテーマを設定することは、今どのような意味を持つのか。

二〇一六年一二月には、いよいよ学習指導要領改訂に向けて中央教育審議会の答申が出され、年が明ければ、やがて新学習指導要領が告示される。これまでも、次期学習指導要領の一つの柱となる学習指導のあり方が、「アクティブ・ラーニング」というキーワードを手がかりにして、実践現場で既に追究されてきている。そこで

は、教科基盤の知識・技能だけでなく、教科を越えた「資質・能力」を身につけさせることが目標とされる一方で、各教科で身につけられる「見方・考え方」とは何かということも問われている。

時期を同じくして、高校と大学における教育をどのように「接続」するかという枠組みの中で、大学入学試験のあり方の検討が行われている。この問題は、国語科との関わりも強い。多くの生徒が競争的に受験するペーパーテストによる国語科の試験において、どのような記述式解答の試験問題を取り入れ、採点を含めいかなる方法で実現するかという難問が、「正答」を求めてさまよっている。

私たちは、思っていた以上に大きな教育改革のただ中にあるが、それは現行学習指導要領下において既に始まっている。改革の基底には、最終学年の受験対策では即座に対応できないような、日々の授業と学習のあり方の変革が求められていることがある。

今回の協議会のテーマは、一つのキーワードによって表されるような将来に向けた取り組みについてではなく、これまで行ってきた日常の授業の中の授業改革や指導の工夫についてふりかえり、その

成果と課題を確かめることを表したものと考える。

二〇一六年八月一日・二日に開催された第五七回広島大学教育学部国語教育学会二日目の協議会では、次の三名の先生方に登壇・発表いただいた。

深井謙作（当時岡山県立勝山高等学校蒜山校地）

「『徒然草』「再」発見」比べ読みから考える兼好の「ものさし」

古田尚行（広島大学附属中・高等学校）

「古文の授業への切り込み方」

安積英司（安田女子高等学校）

「古文の授業の工夫」テキストの向こう側にいる人との問題領域の共有」

本稿では、各氏の発表および当日の協議の概要を進行役の視点からまとめるとともに、今後の古文の授業のあり方という観点から若干の考察を行う。

二 実践提案の概要

(一) 深井実践の概要

深井謙作先生は、高校二年生（一三名）の「徒然草」を扱った単元を報告した。この単元は、前年度の生徒の授業評価アンケートに見られた古典の授業に対する次のような記述を出発点としている（引用は当日の発表資料より。以下同じ）。

「なんでいまこれやってるんだらうと思う。入試にもたぶん

使わないし、わざわざ学校でやらんでもいい気がする。（趣味？）」（I君）

こうした感想が問う古典学習の意味に対して、学習者の人生と関わるような「おもしろさ」を古典の授業において提供することを目指して計画されたのが本単元である。

深井先生は、高一のときの徒然草第二三六段「丹波に出雲といふ所あり」の学習において、彼らが小学校および中学校までの古典の学習を通して形成された徒然草のイメージや兼好像を変容させていることに注目し、そこに学習者の「他者理解の在り方の把握」の变化を見出す。そのことが彼らのこれからの人生において意味のあることであると位置づけ、そうした兼好のものの見方、考え方について新たな発見を促すような授業構成を心がけたという。単元の授業展開は、次の通りである。

第一時

導入 自分がどのような「ものさし」で人を価値判断しているかを挙げる。

活動1 第一〇六段「高野証空上人」の物語内容をまとめる。

活動2 この事件のどういった点が「尊かりけるいさかひ」であるか考える。

第二時

活動 それぞれグループに分かれて、①第一四四段「梅尾の上人」、②第八九段「奥山に、猫またといふものありて」、③第六〇段「真乗院に盛親僧都とて」、④第五三段「これも仁和寺の法師」の章段を分担し、四枚のイラストにまとめて、

第三時

それぞれの話のおもしろさが伝わるように紹介する準備をする。

活動1 それぞれのグループで、担当する章段の面白さが伝わるように紹介する。担当以外のグループは発表を聞いて内容をまとめ、発表グループに質問を行う。

活動2 それぞれの章段における共通点、相違点をまとめ、兼好がどのような「ものさし」で価値判断を行っているかを考える。

まとめ 兼好のものの見方、考え方について意見を書く。

こうした学習を通して、先の、①第一四四段を担当したI君は、次のようなまとめの感想を書いている。

「(前略)僕は①は兼好法師は褒めていると思う。ひたむきに仏教を思う気持ちは兼好法師にはないかもしれないでも(ママ)。熱中している人を冷めた目で見たり馬鹿にしたりする人は、実は熱中している人をうらやましく思うこともあると思う。」(I君)

この記述は、「何かにとらわれてしまっている人はだめで、とらわれないことが良い。」という感想を書いた他の学習者(U君)に対する反論として書かれたものであるという。深井先生は、この記述について次のように述べ、授業の成果として意味づける。

実は、Iくん自身も、部活動も熱が入らず生徒会活動も勧めたものの参加しない生徒であった。そんな彼が、『徒然草』の比べ読みを通して、兼好の新たな側面を発見し、しかも、それを

自分の抱えているであろう「問い」(問題領域)と関連させながら、上のような感想を持つに至ったことは、本授業の一つの成果と言って良いのではないだろうか。

深井先生は、I君が兼好のものの見方に対するとらえ方を変化させているところに、古文テキストと学習者の人生との交わりを見出し、古典が学習者の人生と関わることに古典学習の意義があるという仮説から構想した単元の成果として認めている。

(二) 古田提案の概要

古田尚行先生の発表においては、文学研究と古文の授業との関係について、さまざまな水準から問題提起が行われた。

まず、古文テキストを「読む」という水準についての問題提起である。ここでは、「読む」ということが、音読、本文受容、表記などさまざまな側面において問い直された。次の三つの問いを立て、古文テキストに対峙する際の構えについて論じている。

① 古文をそもそも読めるのか—古代音の問題

② 古文をそのまま読んでいいのか—編集(表記等)の問題

③ 歴史的所産としての濁音符、半濁音符、句読点等

続いて、文学研究において見出された問題や研究成果をどのように授業に反映させ、活かすべきかという水準での問題提起がされた。具体的には、古文テキストにおいて繰り返し見られる、登場人物間のコミュニケーション場面における「問」と「答」という構造に注目した提案である。そこで発せられている問いと答えには研究上も不確定性を有しているので、そのことを授業の中で活かすべき

であるということが、枕草子などを例に提案された。また、言語学や修辭学の研究成果をふまえることで、古文テキストの世界観に沿った細やかな古文の読みが可能になるともいう。

一方、教材の「重ね読み」という水準での提案もなされた。教科書教材が精選されることで古文教材の断片化が進んでいるが、「重ね読み」によって文学としての深く広い読みが可能になるというものである。「心」のあり方に注目した徒然草の「仁和寺にある法師」「名を聞くより」「猫また」「高名の木登り」「ある者、子を法師になして」の一連の章段の「重ね読み」、自己と他者の関係に注目した平家物語の「忠度の都落ち」と近現代小説との「重ね読み」を例に、提案がなされた。

古田先生は、現代の学習者と古文とを結ぶことの重要性は認めつつ、こうした提案を通して、古文テキストの構造や世界、背景をふまえた結び方を追究することの必要性を訴えた。

(三) 安積実践の概要

安積英司先生は、更級日記と石川啄木「一握の砂」との比べ読みを通して、過去を見つめる今の自己をとらえさせることをねらいとした単元を中心に報告を行った。安積先生の報告は、本単元を自らの実践の履歴の中に位置づけながらのものであった。

安積先生は、実践の履歴を三つの側面からとらえている。一つは、古文を読む「力をつける」授業を探究する側面である。古典文法や語彙を中心とした授業から、作者や人物の思考や背景も扱う授業へと進展してきたが、学習者と古文とのつながりを見出すことに

は課題を感じていたという。一方で、現代文の授業には学習者と文学作品とのつながりを重視する側面があった。石川啄木「一握の砂」と尾崎豊「十五の夜」の比べ読みによって学習者に自分の生き方を見つめさせるような授業を行っていたのである。三つ目は、広島県高等学校教育研究会国語部会主催の「国語科授業改善セミナー」への参加と本講座の竹村信治教授と出会いを通して、古文の授業においても学習者と古典作品をつなぐ授業を探究しようとするようになった側面である。古文の読みを通して「テキストの向こう側にいる人」と「問題領域」を共有し、考えさせる本単元は、こうした履歴の中で試みられた実践である。

単元は次のように展開する。

第一次 「古文の「日記」の構造の理解

第二次 「門出」の読解と解釈

第三次 「源氏の五十余巻」の読解と解釈

第四次 まとめ（主題の理解と自己、他者の理解の深化）

「過去を見つめる今」という観点からの「一握の砂」との比べ読みは第三次で、そうした古文の読みをもとに学習者が自分自身における過去と今との関係を考え作文を書くのは第四次で、それぞれ行っている。こうした単元の学習成果の一つを、安積先生は次のように述べる。

資料3—3（第四次の学習者の作文…稿者注）は蓋をしていた過去を見つめている。自分が原因で友を失った過去を書き、今後の誓いを立てるがまだ自信が持っていない。これもまたこの取り組みによって自己理解が深まったと言える。

三 協議の論点

協議においては、さまざま観点から質問や意見が出され、三人の発表者も応じた。ここでは、それらをいくつかの論点にまとめながら述べることにする。

① 古典学習における音声・音読

古典において音声は、単に文字を一定の規則にしたがって音声に置き換えるということの意味するわけではない。音声として伝えられた口承文芸、発音・発声そのものの違い、音声化することの芸術性というように、近代の活字を中心とした文学とは異なる意味を持つ。そうした側面をどのように古典の授業において扱うのかということが問題となった。

② 古典テキストを読むための教材のあり方

教科書教材という形式のみが古典教材の形ではない。影印本、現代の読者が読みやすい漢字や平仮名の表記に改めた活字本、傍注を施したもの、録音したもの、現代語訳、改作、梗概やあらすじ：というように、同じ作品でも古典作品の教材化には幾通りもの形式が考えられる。中央教育審議会は、古典の学習指導における原文主義からの脱却を求めるが、本協議会では、どのような場合にどのようなテキストやメディアによって古典を学習するかということが問われた。

③ 作品の構造と言語活動との関係

安積実践においては、今の視点から過去を語るというテキストの

持つ語りの構造や認識的な構造を取り出して検討した後、学習者が同じような方法で文章を書くという言語活動を行っていた。一方、深井実践においては、学習者は、担当した徒然草の章段のおもしろさをマンガで伝えるという言語活動を行っていたが、これは章段の末尾等に見られる語り手の評とは必ずしも構造が同じではない。

「活用」にしろ「アクティヴ・ラーニング」にしろ、発信型の言語活動を取り入れた学習においては、古文テキストと言語活動との間にこうした視点や方法のずれや違いが生じる。そのずれや違いが肯定的にとらえられるか、否定的にとらえられるかは、最終的には目的やねらい次第ということになるのだが、しかし、元のテキストの持つ構造を全く無視したり、無自覚であったりすることは認められない。異なる視点や構造による表現を行わせるにしても、テキストの何をどのように変換するのかを学習者にも意識させることが望ましい。

④ 教師と学習者の関係

では、そうしたテキストに対する見方を学習者はどのように発見するのか。深井実践においては、「とらわれ」ということばがいくつかの章段を関連づけて読むためのキーワードとなっていたが、それは教師から出されたものだという。今後協同的な学びを実現する実践を深めていくにあたっては、こうした見方を学習者自身にどのように発見させるのがポイントになってくるのではないか。安積実践においては、近代作品（「一握の砂」）を手がかりにした比べ読みという方法によって、そうした学習を実現しようとしていた。古田提案における徒然草の重ね読みも、学習活動を工夫すること、

そのことを学習課題にしていくことが求められる。

⑤学習者同士の関係

古文を読み深める際、深井実践におけるI君に対するU君のように、副教材よりむしろ学習者同士の関係が媒介となることが多い。深井実践においては、U君の書いた評に対してI君が反応しており、それは二次的な教材にもなっているが、それは単にテキストとして存在するのではなく、生徒の人格と結びついたものである。授業という公共的な場において、学習者同士をいかに対立させたり、承認させたり、共感させたりするかということは、協同的な学習を成立させ、深めていくうえでも、今後さらに重要な課題となっていく。

⑥文学研究と授業づくりとの関係

学術的な知識に終始した授業は、これまで例えば訓詁注釈主義ということばによって批判されてきた。しかし、文学研究や言語学研究においても、文学や国語という概念がとらえ直されたり、「知識」に還元されない「見方」を提示するような研究が行われたりしている。国語科教育においても、そうした「見方」をふまえて授業の改善を行ったり、学習内容を更新したりする必要性が高まってきている。

四 おわりに

アクティブ・ラーニングという問題を設定しなくても、古文の授業や学習を進展させ、深化させるような本質的な問題や課題を追究

していると、そのことに通じる問題について検討することになる。アクティブ・ラーニングは、「真正の学び」を追究する中で出てきた概念であり、ここでは、学習の本身や身につけられる学力がどのようなものであるかが問われている。今回の協議は、そうしたことの検討になったと考える。

その中で、さらに明確になったこととして、前項で「③作品の構造と言語活動との関係」としてまとめたことに再度触れておきたい。「活用力」に焦点を当てた言語活動や「パフォーミング課題」、アクティブ・ラーニングのための学習課題等においては、古文の授業であれば、現代の現実の文脈に引きつけた表現活動を行うという学習課題がよく設定される。その場合、学習の文脈ばかりが前景化して、古典作品をその文脈に合うように解釈し過ぎるというきらいがある。このことについて、深井先生の実践報告においては、「古典の自己化」という言い方で問題が指摘された。また、古田提案では、「古文の持つ力」を大事にするという主張によってこれを戒めていた。安積実践において学習者が行った言語活動は、更級日記の語りの構造をふまえたものであった。ここで重要なのは、古文テキストの問うていることは何か、それは私たちが普段感じている問題と同じか、ということを問い返してみることであろう。古典の学習において言語活動を設定する際には、この点に留意したい。

もう一つ、協議会では直接問題にはならなかったことであるが、安積先生の実践報告において取り上げられていた実践の履歴も注目したいことである。安積先生は、今回の古文の授業改善を自らの実践の履歴の中に位置づけていた。これまで、古文の授業において求

求めていた授業像と、現代文において求めていた授業像とが分裂していたが、研究会に参加し他者と関わる中で、それらが統合されて、今回の実践が行われたというプロセスが描かれていた。アクティブ・ラーニングへの取り組みが、こうした教師としての自己の実践履歴と結びついて行われるのであれば、それは外在的なものや一時的なものにとどまらず、教師自身にとって本質的な授業改善となるであろう。このプロセスは、アクティブ・ラーニングという概念が実現しようとする知識形成のプロセスでもある。そういう意味において、このキーワードに期待をしたい。

(広島大学)